

子育て支援における天理教の社会福祉活動 (2)

天理大学人文学部准教授
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

前回は、日本の子育て支援をめぐる現状について整理した。2022年に養徳社から新田恒夫・杉江健二著『子どものおたすけ』が発刊されている。同書では、発達障害の理解や、児童虐待の実態などが整理されると共に、近年、天理教内で広がりを見せている「イライラしない子育て講座」についても詳しく紹介されている。今回は、その内容を紹介し、子育て支援における天理教の社会福祉活動の可能性について整理する。

少年会活動と子育て支援

これまで天理教の各地の教会では、地域の子どもを集めて、子ども会などがおこなわれてきた。こうした教会活動のほか、農業の繁忙期に子どもを預かる季節託児所、戦後に広がる里親活動もまた、子育て支援に位置づけることができる。毎年、開催されるこどもおぢばがえりは、多くの子どもや、子育てをする親が天理教の教会を知るきっかけとなり、教会お泊まり会や、鼓笛活動などへとつながっていく場合もある。核家族化がすすみ、子育ての孤立化がすすむ現代社会においては、教会の少年会活動を通じて、子育てを終えた世代が支援を提供し、子育て中の親が悩みを相談したりすることにもなる。そのため、少年会活動を運営する側が、地域社会の子育ての問題に関心を持ち、教会にやってくる親が、どのような課題を抱える可能性があるのかを知っておくことが求められる。実際に、地域の小中学校のPTAの役員を担ったり、行政の子育て支援に携わっている教会長も多く、地域社会から子育て支援の社会資源の一つとして捉えられている教会も多くある。教会長自身のそれまでの経歴を活かして、学習塾を開いたり、書道、雅楽、ダンスなどを教える機会を設け、子育て世帯とのつながりをもつ教会もある。少年会活動をはじめ、教会を広く、地域社会に開くことが、孤立する子育て世帯への支援につながるという。

イライラしない子育て講座

教会がもつ子育て支援の役割に期待して作成されたのが「イライラしない子育て講座」である。この講座は、天理教美張分教会長の杉江健二氏によって2017年に開発された。杉江氏は、教会長として、長年、里親活動や不登校、ひきこもりの支援に携わっており、一般社団法人青少年養育支援センター陽氣会を設立、現在では、全国各地で同講座を開催している。核家族化が進み、子育てについて相談したり、学ぶ機会が少なくなっている現状の中で、「子育てを学ぶ時代」がはじまっているとし、子育てにあたってのコツや、向き合い方を伝える内容となっている。「イライラしない子育て講座」は、杉江氏が、教会近隣に暮らす子育て世帯との接点をつくり、CPA (Communicative Parenting Approach) を学ぶ内容として開発。その後、天理教里親連盟が、CPAを里親養育にも活用したいという要望から、天理教の信仰要素を取り入れた天理教ファミリー・コミュニケーション・アプローチ (TFA) が開発される。CPAは天理教の教えを知らない一般向け、TFAは信仰者向けという位置づけである。現在、TFAは修養科でも取り入れられ、子育てを通じて教えを学ぶプログラムにもなっている。

「イライラしない子育て講座」は、子育てで生じる親と子のコミュニケーションのずれを修正する内容となっている。例え

ば、親が子どもに対して、「ちゃんとしなさい」と声をかけたとしても、子どもには「ちゃんと」の意味が伝わっていないため、具体的に伝わりやすい指示を出す方法が示される。また、子どもとコミュニケーションをとる際には、目線を合わせ、壁を背にするなどして、子どもが集中して話を聞くことができるように環境を整えるなどの工夫が示されている。子どもからみて、大人がどのように見えているのかをわかりやすく伝えることで、「子どもが言うことを聞かない」のではなく、「大人の伝え方の工夫が必要」ということが明らかにされている。さらには、子どもの話を受容的に聞く方法や、子どもの行動を褒める方法などが示される。これら「イライラしない子育て講座」に共通するのは、親と子が、噛み合ったコミュニケーションをとるための方法が示されていることである。

信仰的な気づき

『子どものおたすけ』では、「イライラしない子育て講座」の開発者である杉江氏のさまざまな信仰的な気づきが紹介されている。杉江氏は、長年、里親として活動する中で、里子に懸命に寄り添っても、里子の数や、児童虐待の数は減らないことに気づいた。そこで、その根本となる子育て支援に着手するようになる。近年では、児童虐待につながる不適切な養育を「マルトリートメント」と表現するが、そうしたことを学ぶ中で、杉江氏自身が、親が子どもの意見を聞かずに、一方的に親の意見を子どもに押し付けるコミュニケーションをとっていたことが反省的に語られている。特に、天理教においては、教会長と信者の関係を「親子」に例えることも多い中で、子育て支援を学ぶことは、教会長としての自らのあり方を問い直すことになると述べられている。

また、杉江氏の長男が不登校になった経験から、自らが「児童福祉の専門家」になっていたことへの反省的な気づきが示されている。不登校やひきこもりの相談を受ける中で、「少しでも早く結果を出すこと、効果的な解決法を探ることを急ぐあまり、不登校・ひきこもり問題の知識や表面的な対処法の指導にばかり走ってしまい、その問題の背景にある、その当事者である子どもと親との関係性や親の通り方、その節に込められた親神様の思いやその生かし方など、もっと深いところにある大切な部分に入っていくことがおざなりになっていました」(p.282)と述べられている。杉江氏自身が、不登校の親となることによって、これまで以上に、不登校の親に共感して、話を聴くことができるようになり、正しい方法を提示する専門家ではなく、共に親神様の思いを探る存在となったとする。

先述したように「イライラしない子育て講座」には、親と子のコミュニケーションを見つめなおす「きっかけ」が示されている。なぜ、自分たちが親子になったのか、家族として暮らすのか。その神意を探るための入り口に立つためのコツが「イライラしない子育て講座」と言えるだろう。

同書では、最後に教会の子育て支援の可能性についても述べられている。子どもの問題が幅広く、多様になる中で、おたすけに携わる者同士が、知識や経験を共有する場の必要性があるとして、杉江氏らによって2021年にTON×TON (天理教オンラインネットワーク & 天理教おたすけネットワーク) が設立されている。こうしたネットワークが、さらに地域の孤立した子育て世帯を救う手立てとなることを期待したい。